

また明日会いましょう 山本周五郎

ある年の春、千葉県浦安町の生活がゆきづまって、にっちもさっちもならなくなったとき、東京から古本屋を呼んで貧弱な蔵書をたたき売ったことがあった。百円ちかくの金を手にしたわたしは、この金こそ有効につかわなくてはならぬと決心してふたつの案をたてた。ひとつは永年の望みであった北海道ゆきであり、ひとつはその金をどだいとしてもう一年浦安にいようというのである。わたしはひと晩かかって両案のこまかい計算書をつくった。

わたしの記憶が正しいとすれば、旅行案の方は木賃宿に泊まることから、車中の弁当までちゃんと定めてあったし、後案の方では一日一菜、あとは玄米と梅干しということがいかめしく決定していたと思う。

いまその日記をひろげてみると、蔵書を買ったのが昭和四年二月二日のことで、三日には北海道ゆきを断念して浦安に住むこと、そしてひと月十三円（家賃七円の茫屋）以内の生活費を厳守すること、というのが書いてあり、別行にして大きく「戦ははじまった、さあ起て周五郎よ！」としたためである。かかる悲壮なる決心にもかかわらず、同月九日——つまり初めの日から一週間め——には、「遂に囊中八銭となる、しかしそれだけ真剣になれるのは有難い」ということが、小さな字で走り書きにしてあるのだ。なるほど囊中八銭では真剣ならざらんと欲するも得べからざるべけんやであろう。

仏蘭西の小話にこんなのがある、君はなにを煩悶しているのだという書きだしである、「君が何を煩悶しようとする問題はふたつより外にない、君は健康か病気か、健康ならば云うことはあるまい。若し病気だとしても問題はふたつだ、その病気はなおるかそれとも死ぬかだ、なおる病気なら文句はないし、死ぬとしたところで問題はふたつしかない、即ち極楽へゆくか地獄落ちかだ、極楽へ行くとすればこれまた不服はないであろう。地獄へ行くとしたら、——第一、君はそんなものがあるということを信ずるか、信じないだろう、それなら結局君にはなににも煩悶はない筈ではないか」

2分法による判断はわかりやすいが、すりかえの手法ではないかと思っていた。知りたかった事例の一つだ。

## 武士道の精髓

また大楠公が湊川の一戦で、いよいよ、明日は討死ときめたとき、禅僧楚俊を訪ねて『生死交謝のとき如何』と問うた、楚俊は『両刀ふたつながら裁断し一剣天に倚って寒し』と答えた。正成はなお会得せず、『畢竟如何』と言う、すると楚俊が『喝』と叫んだ。それで正成は大悟することができ、勇躍して戦場へ向ったという。これもかなり弘く知られていることだが真実とは思えない。正成は湊川へ出陣するまえ、桜井の駅で正行と訣別するとき、『わが一族のあらん限り、郎党のさいごの一人となるまで大君のおんため逆賊を討つべし』と遺言している。つまり討死の覚悟がきまっていたのだ。否、それよりも、初めて笠置かさぎへ召されたとき、死ぬ覚悟はできていた筈である。湊川の決戦を前にして、いまさ

ら、生死の関頭を問う必要はなかったと思われるがどうだろうか。

~~~~~

「畢竟如何(ひっきょういかん)」  
それでどうした？ つまるところ何？

【喝】 (喝) カツ

《名・造》声がかすれるほどの大声を出す。大声を出してしかる。大声でおどす。しかる声。特に、禅宗ではげましの声。

~~~~~

では、武士道の精髓とは、どのようなものか、一言にして云えば、「日本人の魂」である。久米、大友の氏(うじ)かばねの思想である。大君のへにこそ死なめ……この歌にあらわれているところの末代永劫のはてまで、あらゆる氏族をあげて、**大君のために捧げまつる**、この観念である。そこにはなんの理由もない。日本人の血そのものなのだ、いかなる学問芸術によっても、日本人である限りこの「血」の内容を変えることばできない。ぎりぎりに押し詰めていった根本には、かならずこの信念にゆき当る。